Program

プロコフィエフ:
Sergei Prokofiev
(1891〜1953)

バイオリンソナタ 第2番 Op.94
Violin Sonata No.2 Op.94
I. Moderato
II. Allegretto scherzando
III. Andante
IV. Allegro con brio

ベートーヴェン:
Ludwig van Beethoven
(1770〜1827)

チェロソナタ 第4番 Op.102-1／第5番 Op.102-2
Cello Sonata No.4 Op.102-1 / No.5 Op.102-2
No.4 I. Andante – Allegro vivace
II. Adagio – Tempo di'andante – Allegro vivace
No.5 I. Allegro con brio
II. Adagio con molto sentimente d'affetto
III. Allegro – Allegro fugato

— 休憩 —

ドヴォルザーク:
Antonín Dvořák
(1841〜1904)

ピアノ五重奏曲 第2番 Op.81
Piano Quintet No.2 Op.81
I. Allegro, ma non tanto
II. Dumka: Andante con moto
III. Scherzo (Furiant): Molto vivace
IV. Finale: Allegro

Program Notes

プロコフィエフ：バイオリンソナタ 第 2 番 Op.94
Violin Sonata No.2 Op.94

プロコフィエフのバイオリンソナタについて語る時、巨匠バイオリニスト、ダヴィッド・オイストラフの名前は欠かせない。それはブラームスにはヨアヒム、グラズノフにはアウワーといった、作曲家と名手が互いに刺激し合って傑作を誕生させた関係と全く同じである。
1943 年戦時下のモスクワでフルートソナタとして作曲されたが、信頼を寄せる友人でもあった名手オイストラフからバイオリン用に編曲するよう提案があり彼はそれを快諾、翌 1944 年 6 月にモスクワでオイストラフとオボーリンのコンビで初演された。
戦争の暗い影を思わせる 1 番に比べ新鮮な叙情味に溢れ尚且つアバンギャルドさも併せ持つこの 2 番は、世界的にも人気が高く、今ではフルートより圧倒的にバイオリンソナタとして演奏される機会が多い。

第 1 楽章 モデラート
甘いメロディーと不思議な和声で瞬く間にプロコフィエフの世界へ誘われる。

第 2 楽章 アレグレット スケルツァンド
アバンギャルドなスケルツォが前衛的で面白い。

第 3 楽章 アンダンテ
夢想の世界が拡がり再び前衛的なフィナーレにつながっていく。

第 4 楽章 アレグロ コン ブリオ
プロコフィエフ真骨頂の圧巻さを見せつけながら洗練されたセンスも感じさせる。

ベートーヴェン：チェロソナタ 第 4 番 Op.102-1 ／第 5 番 Op.102-2

Cello Sonata No.4 Op.102-1 / No.5 Op.102-2

1815年、44歳のベートーヴェンは7年前に第3番のチェロソナタを書いた頃から続いた「傑作の森」と呼ばれる充実した彼の音楽人生の中盤を終え、さらに深淵な彼独自の世界に入ろうとしていた。当時ウィーンで名声を博していた弦楽四重奏団のチェリスト、ヨーゼフ・リンケとベートーヴェンの生涯の友であったエルデーディ伯爵夫人によって初演されたこの2曲は、彼のエルデーディへの敬愛の想いに溢れた珠玉の作品である。

第 4 番

第 1 楽章 アンダンテ － アレグロ ヴィヴァーチェ

慈愛に満ちた豊かな旋律とチェロとピアノの美しい掛け合いが見事。その後、一変して迫力を増していく。

第 2 楽章 アダージョ － テンポ ド アンダンテ － アレグロ ヴィヴァーチェ

このような自由な即興的な書き方も今までのベートーヴェンにはなかったもので、とてもプライベートな雰囲気を感じさせる。優しさに溢れた始まりはこのままベートーヴェンとエルデーディの話し声にさえ聞こえてくる。

第 5 番

第 1 楽章 アレグロ コン ブリオ

快活なピアノから始まり、音楽は流麗な自信にあふれて進んでいく。

第 2 楽章 アダージョ コン モルト センティメンテ ダフェット

低音で奏でられる宗教的な深い悲しみを堪えたような響きに心を揺さぶられる。ベートーヴェンはチェロソナタを 5 曲書いた中で、ここだけに緩徐楽章を入れている。

第 3 楽章 アレグロ － アレグロ フガート

バッハを彷彿とさせるような圧倒的な完璧さで 4 声のフーガを書き、これをフィナーレに持ってくる。これにも大作曲家ベートーヴェンの持つ力と天才ぶりを感じさせられる。

ドヴォルザーク：ピアノ五重奏曲 第 2 番 Op.81

Piano Quintet No.2 Op.81

ドヴォルザークが 46 歳の時にプラハで作曲した。この作品はドヴォルザークの代表的傑作のひとつに数えられるだけにとどまらず、シューベルトの「ます」、シューマン、ブラームス、フランクのそれと共に、古今のピアノ五重奏の五大名曲に挙げられるものである。
また中声部のヴィオラを重んじて、その特色を生かしているのもこの楽器を好んで弾いたドヴォルザークの性格を強く出したものである。
彼の色彩、メランコリックな雰囲気と幸福感に満ちた味わいの絶妙な交錯、ロマンティックな旋律がふんだんに表現されている。

第 1 楽章 アレグロ マ ノン タント

どこか懐かしい親しみやすいメロディーから始まり、展開部ではヴィオラが哀愁的に歌うのが印象的。表情豊かに再現部を第1バイオリンが表したあと、皆で力強く壮麗なクライマックスを迎える。

第 2 楽章 ドゥムカ アンダンテ コン モート

スラヴの哀歌（ドゥムカ）によるドヴォルザークの個性的な楽章である。ピアノが静かに悲しい旋律を奏で出し、ヴィオラとバイオリンとが情感を深めていく。

第 3 楽章 スケルツォ（フリアント）モルト ヴィヴァーチェ

フリアントというスケルツォ。フリアントはチェコ地方の急速な舞曲で、激しい部分とのびやかな部分とからなっている。

第 4 楽章 フィナーレ アレグロ

全体をスラヴ特有の激しい情感が包み、ボヘミアの大地に想いを馳せるような感極まる終曲。最後に、温かい涙が頬を伝うようなノスタルジーにかられるメロディーをバイオリンとピアノが順番に奏でたあと、逞しく盛り上がっていくコーダで力強く終わる。

（向井小百合）